

キダチミカンソウ



<学術名>

phyllanthus niruri

<日本名>

キダチミカンソウ

<マレー名>

dukong anak

<アーユルベータ名>

Bhuumyaamalaki

<飲まれ方>

- ・下痢
- ・血尿
- ・黄疸

フィランサス(学名 Phyllanthus niruri)

この植物は従来、アジアでは黄疸や肝炎のほかに、消化不良、仙痛、下痢、赤痢などの胃に関する苦痛の治療に重要な治療薬です。最近の研究では、このハーブには抗ウイルス性があり、特にB型肝炎ウイルスに有用であることが明らかになりました。

植物の使用部位:ハーブ全体

活性成分

フィランチンおよびヒポフィランチンなどのリグナン、フラボノイド、アルカロイドのほか、生体外の抗ウイルス剤のゲラニン(タンニン)。

最近の研究

フィランサスは1988年にランセット誌(Lancet Medical Journal)に発表された後(1)、最近になって注目を集めるようになりました。所見は以下の通りです。

- § 用量は600mg/日の葉とした。
- § 試験はB型肝炎ウイルスキャリアを対象とした。
- § 追跡調査のための初回の診察(15~20日)までにB型肝炎表面抗原(HBsAg)が消失したのは、プラセボ群ではわずか4%であったのに対し、フィランサスの投与群では37名のうちの59%に消失がみられた。
- § 最長9カ月が経過するまで、これらの被験者にHBsAgは再び認められなかった。
- § 有意な副作用はみられなかった。

さらに臨床試験や研究室での実験により、フィランサスはB型肝炎ウイルス(HBV)を阻害し、表面抗原に結合することが明らかにされました(6)。B型肝炎ウイルスは複製にDNAポリメラーゼを必要としており、この酵素の阻害におけるフィランサスの作用はHBV様ウイルスに特異的であるとみられます。

また、フィランサスの水性エキスは生体外でヒト免疫不全ウイルス(HIV)逆転写酵素を阻害しました。この阻害作用に関与する成分は、repandusinic acid Aと同定されました。(7) ウイルス性肝炎が原因の黄疸がみられる小児では、用量50mg/kgの場合も大多数の例で急速な改善をもたらしました(10)。このリグナン成分により、生体外試験での肝保護作用が実証されました。(2)

医薬用途

- § 急性肝炎および慢性持続性肝炎などのウイルス性肝疾患に。慢性活動性肝炎の治療の一端として。
- § その他のウイルス性疾患にも利用できる可能性あり。
- § 糖尿病をサポートする可能性あり。

References

1. Thyagarajan, S P et al: Lancet 2, 764 (1988)
2. Syamasundar, K V et al: J Ethnopharmacology 14, 41 (1985)
3. Milne, A et al: New Zeal Med 107, 243 (1994)
4. Bagchi, G D et al: Int J Pharmacog 30, 161 (1992)
5. Thyagarajan, S P et al: Indian J Med Res 76, 124 (1982)
6. Venkateswaran, P S et al: Proc Natl Acad Sci USA 84, 274 (1987)
7. Ogata, T et al: AIDS Res Hum Retroviruses 8, 1937 (1992)
8. Umarani, D et al: Ancient Sci Life 4, 174 (1985)
9. Higashino, H et al: Nippon Yakurigaku Zasshi 100, 415 (1992)
10. Dixit, S P and Achar, M P: J Natl Integ Med Assoc 25 (8), 269 (1983)
11. Nadkarni, K M Indian Materia Medica, Pg.947.
12. Medicinal Plants of India ICMR, Vol-2, Pg.405 (1987)

Indian Herbal Remedies : Springerより引用 (Rational Western Therapy, Ayurvedic and Other Traditional Usage, Botany)

トウダイグサ科
コミカンソウ

生育地

Bhuumyaamalakiは小低木（高さは最高で60cm）であるが、Aamlakiは高木である。

コミカンソウ（学名 *Phyllanthus fraternus*/*Phyllanthus amarus*）は、インドの高温地域全体に冬の雑草として生育する様子がみられ、特に1000mまでの高地で栽培されている。

コミカンソウ（学名 *Phyllanthus urinaria*）は拡散型の枝ぶりのハーブであるが、インド全域の平原にあたるパンジャブからアッサムまでと、南はケララに到るまでの、標高1000mまでの耕作地の雑草として見かける。

アーユルベエダのハーブに関する専門書の大半は、このBhuumyaamalakiという薬物を、誤ってコミカンソウ（学名 *Phyllanthus niruri* Linn）として扱っている。インドのアーユルベエダの処方箋(Ayurvedic Formulary of India)では、Taamlakiがコミカンソウ（学名 *Phyllanthus niruri*）と同じものとされている。

しかし、カリフォルニア大学のウェブスター教授のこの属に関する分類学研究では、コミカンソウ（学名 *Phyllanthus niruri*）はアメリカの種であることが明らかにされている。その結果、コミカンソウ（学名 *Phyllanthus niruri*）にあたるインドの薬物は、コミカンソウ（学名 *Phyllanthus fraternus* Webster）と同一視されている（ADPS.）。

古典名および一般名

アーユルベエダ名：Bhuumyaamalaki、Bahupatri、Bhuudhaatri、Taamalaki、Bahuphalaa.

ウナニ名：Bhui Aamalaa.

シッダ名：Kizhai-nelli、Shivappu-nelli.

使用部分

全草、根。

用量

絞り液10～20ml、粉薬3～6g、浸出液14～28ml。

古来の用法

黄疸には、バターミルクでペースト状にしたBhuumyaamalakiが処方された。また、根の煎出液または乾燥させた薬も投与された（Vaidyamanoramaによる）。

機能性子宮出血、血尿、出血を伴う下痢には、粉薬かペーストにした根のほかに種子も、重湯とともに投与された（Bangasenaによる）。

コミカンソウ（Bhuumyaamalaki）全草（20g）と、マリチャ（コショウ、学名 *Piper nigrum*、計20個）のをすりつぶして混ぜ合わせたものは、尿疾患の緩和に処方された（Yogarataakaraによる）。

民間療法では、柔らかい葉の浸出液を慢性の赤痢の場合に投与する。根や全草に重湯を配合して湿布剤にしたものは潰瘍、びらん、腫脹に、また塩を混ぜて作った葉の湿布剤は皮膚疾患に使用している。

ウナニ医学では、この植物を開通薬、利尿薬、冷却薬、および収斂薬として、黄疸が出た場合に使用している。